

メイドから
母になりました 3

夕月星夜
Seiya Yuzuki



RB

レジーナ文庫



リズ

レオナルの同僚の魔法使い。
彼に憧れていて、
脇目も振らずに猛アタック中。

ヨシュア

レオナルの同僚の
魔法使い。
クールな性格で、
リズを窘めることも。

セドリック

レオナルの同僚の
魔法使い。
穏やかな美少年だが、
若干イイ性格をしている。

ユーフィス

ソロルの森に住む
エルフの王子。
ミリアムに特別な想いを
抱いている。

ミリアム

魔法で眠りについた侯爵令嬢。
精霊や妖精と対話ができるため、
何者かに狙われていて……？

シド

レオナルと契約している精霊。
ちょっと口は悪いけれど、
気のいいお兄さんの存在。

登場人物 紹介

ジル

レオナルの養女。
見習い魔法使いとして
役に立とうと努力している。
お父さんお母さんが
大好きな6歳児。

リリー

異世界に転生した元女子高生。
レオナルに頼まれジルの
『母親役』として奮闘中。
レオナルのことが
気になり始めている。

レオナル

ジルの養父で、リリーの^{あるじ}主。
凄腕の魔法使い^{あるじ}なのだが
女性関係には疎く、
意識してか無意識にか
リリーに甘いセリフを言うことも。

目次

メイドから母になりました 3

書き下ろし番外編

空泣く日にはことごと

メイドから母になりました
3

一 薔薇の魔法で眠る人

夜遅く、私——リリー・ルージャは屋敷の居間で針仕事をしていた。

「んー、今日はここまでかなあ」

仕上げたばかりの刺繍を明かりに透かして確かめ、私は小さく息を吐く。

結婚式に花嫁が身につけるウェディングヴェールを作ってみようと意気込んでいるのだけれど、予想外に時間も手間もかかるんだなあ。刺繍は得意なものの、いつもの作業とは勝手が違って難しい。

今取りかかっているのは、かがり縫いの作業。これが想像以上に手こずっている。生地が薄くて柔らかい分、下手な場所に針は入れられない。でも、しつかり縫わないとすぐに解れる。その上、ちょっとでも強く生地を引っ張れば、あつという間に皺ができてしまう。

こんな気の遠くなりそうな作業だけど、投げ出すことなく夜に少しずつ進めている。

その理由は、作ったウェディングヴェールをいつか、可愛い娘のジルにあげたいからだ。

ジルは、私の雇い主である魔法使いレオナル・マリエル様の養女。

まだ六歳だけど、見習い魔法使いになるほどの実力と魔力を持った女の子だ。ストロベリーブロンドの髪に、空みたいに青くて大きな目を持った可愛い子で、私のことをお母さんと呼んで慕ってくれている。

私はジルの母親代わりとしてレオナル様に雇われているけど、仕事なんて関係なくジルの愛しい自分の娘だと思っていた。

ジルは、生まれ持った強い魔力のせいで、実家の子爵家で幽閉されていたらしい。実際、初めて出会った時には酷く痩せていた上、人に怯えるような素振りを見せていた。

今は可愛らしい笑みを浮かべてくれるし、体も少しずつ成長している。けれど、以前受けていた仕打ちは、まだまだジルの心に傷跡を残しているようで、時々不安そうな様子を見せることがあった。

そんなジルに、私がなにをしてあげられるかなって考えて思いついたのが、ウェディングヴェールを作ること。

何年も根気のいる作業を続けて作るヴェールは、愛情がないとできないでしょう？嫁ぐ時にこれを見れば、ちゃんと愛されていたって実感できるかなって思ったんだ。こ

の考えは、前世で読んだ本の受け売りなんだけどね。

あ、今、前世って言ったように、私はいわゆる転生をしている。日本の高校生だったある日、神様の喧嘩けんかに巻き込まれて死んだ私は、一生重い後遺症を抱えて生き返るか、転生するかの二択を与えられたんだ。

当時の私の家は父子家庭で、下に二人の妹弟きょうだいがいて、生活が結構厳しかった。そんな中で、一生ものの後遺症を背負って生きることが選べない。

だから、私は神様に、残していく愛しい人たちが『幸せ』であるように見守ってほしいとお願ひして転生をしたのだ。

本当は元の世界で生きたかったし、家族と普通に生活して幸せになりたかった。でも、その道を選んだら、私が私自身を許せなくなりそうで怖くて逃げたんだ。前世で恋人だった、あの人からも。

私は今の人生では、恋だけはしないと決めている。大好きだったあの人と一緒に苦しくとも生きることを選ばなかった私が、他の誰かと生きる権利なんてないと考えているのだ。それに、まだ心の奥の方で、『私』が彼を好きだって叫んでいるから。

正直に言って、自分でも相当歪んでいると思う。だけど、レオナルド様はその歪みも丸ごと受け入れてくれるんだよね……

彼に、前世の話はできていないし、誰にも話すつもりはない。だけど、私が秘密を持っていると知っているのにそれごと受け入れてくれるんだから、レオナルド様は度量が広いよね。そんなレオナルド様だから、私もずっとここで働けたらって思っているんだ。

「あ？ リリー、こんな時間になにやってんだ？」

「シドさん」

ひと息ついた時、居間に顔を覗かせたのは、レオナルド様と契約している精霊のシドさんだった。

短くてツンツンはねた銀髪に、レオナルド様と同じ金の瞳。男性らしい整った顔のシドさんは、人好きのするイケメンさんだ。彼とそっくりなレオナルド様もとてもないイケメンだし、他に契約している二人の精霊さん——ミスとアムドさんだって凄い美形だから、もう美形には慣れたというかなんというか……

そんなことを考えていると、シドさんが渋い顔で言い出す。

「……もうちょい危機感を持てよ」

「え？」

「夜更けで人に会う確率が低いとはいえ、今リリーが着てるのは寝間着だろ？ いくら

ガウンを羽織^はっているからって、そんな薄着でリビングにいるんじゃないよ」

あ、なんだかお兄ちゃんみたい。思わず笑えば、シドさんの眉間に皺^{しわ}が寄る。

「今更ですよ。それに、もつと際どい恰好で部屋に攫^{さら}われたこともあるので」

あれ、なんかシドさんが固まっちゃった。数拍おいてから、まさかという表情で彼が口を開く。

「……その相手って、マスター、か？」

「ええ、ジルについて教えてくださった時に。あの時はガウンを着る暇もなく、かろうじてショールを羽織^はりましたからね。寝室に呼ばれていたらちよっと駄目ですが、さすがにそれはなかったのです」

私の説明に、シドさんは納得した様子だった。だけど深いため息を吐いている。

「……それにしても……はあ……」

「レオナルド様相手に危機感を持てと言われても困りますよ？　そういった意味で呼ばれれば別ですが、基本的にメイドとして、レオナルド様の望むままにしますから」

「それで襲われたらどうするんだ!!」

「レオナルド様に？」

「……」

あ、黙った。そうだよ、あの女性嫌いというか、女性不信のレオナルド様だよ？　私には心を許してくれているけど、あくまで家族^{わく}って枠^わに入れているからだと思うし。

言いくるめられかけたシドさんだけど、やっぱり苦い顔をしている。

「だが、今は俺がいるんだぞ」

「え、シドさんは、レオナルド様に顔向けできないようなことを私にしないでしょう？」

「それは、俺を男として見てないって意味か？」

低い囁^{ささや}きに、私は一瞬だけ息を止めてしまった。

「信頼^{しんらい}してるってことですよ」

シドさんの眩^{くら}きには、なにかが秘められているような気がしたけど、これしか言えない。

「じゃあ、俺を男として見てはいるんだな？」

「シドさんは頼りになる素敵な男性です」

「……なら、今回はこの辺で勘弁してやるか」

ひとまず矛^{はこ}先^{せん}を取めてくれたシドさん。ホツとしたけど、彼が急に隣へ腰を下ろすから距離が近くなって、内心どきまぎした。

その上、顔を近付けて、興味深そうに私の手元を覗き込んでくる。

「で、それは刺繍か？」

「ええ、いつかジルが嫁ぐ時に被るヴェールを作ってます」

「見事なものだな」

称賛の声がこぼれて笑ってしまう。シドさんが見終わってから使っていた道具を片付け、ヴェールに癖がつかないようふんわりと丸めて箱に入れる。ふたつとも、部屋の棚にしまい込めばジルに気付かれることもないだろう。あの子には裁縫道具の類だから触らないでねってお願いしているし、約束を破る子じゃないもの。

「そういうリリーは、さっきみたいな刺繍のある服は着ないよな」

「普段の仕事じゃすぐに汚れますので。機能的な服の方が好きなの」

「でも女の子なんだから、たまには着飾ってもいいんじゃないの？ 買ったたりしないのか？」

うーん、そう言われてもなあ。着飾ること自体、あんまり好きじゃないし……

「ジルには色々着せたいなって思うけど、私自身は登城の時に着るドレスで充分です。それに自分で買ったたり作ったりしなくても、レオナルド様に散々買ってもらいましたからね」

ミスとレオナルド様がノリノリで選んで、いらないうって言っても止めてくれなかつ

たんだよね……って、なんでシドさん、ちょっと機嫌悪そうなの？

「マスターに買ったもらった服、な」

「え、ええ……」

なにがシドさんの癖に障ったんだろう。つい身構えてしまう。

「なにか問題がありましたか？」

私の問いに、シドさんは背筋に冷たいものが走りそうな、寒々しい笑みを向けてくる。こんな顔をされてもですね、言ってもらわなきゃわからないんですけど……

「本気でわかんねーの？」

「ええ」

じつと見つめていたら、シドさんは苛立ったみたいに頭を掻き乱した。

「リリーは、男が女に服を贈るのは、脱がせたいからだって聞いたことねーのか？」

「……は？」

意味を理解するのに三秒かかった。……え、シドさんなにを言ってるの？

「ありえないですよ、レオナルド様がそういった理由で服をくださるなんて」

「なんで、そう言い切れる？」

「だって脱いだら、似合っていたのってしょんぼりされたので」

そう言ったところ、シドさんは転がるようにソファから滑り落ちた。

「はああああ？ おま、ちょ……！」

シドさんは耳まで真っ赤だ。嘘はついてないんだけど、そんなに反応をされると困ってしまう。

「し、シドさん大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけないだろ、脱いだってどういことだよ!!」

「だって、食事を作る時に汚したら嫌じゃないですか。動きにくいですし。仕事をするためにいつもの服装になるのは駄目でしたか？」

「……」

わあ、今度は呆気^{あっけ}に取られた顔になった。シドさん、表情豊かだなあ。

「……脱いだって、着替えたって意味かよ……」

「それ以外にないが？」

首を傾げて聞き返す。うん、まあ、本当はシドさんがなにを言いたかったのかくらいは気付いている。でも、すっとぼけます。

きょんとした表情を心がけてシドさんを見つめれば、彼がうっと言葉に詰まるのがわかる。

「だっ……くそっ、わかっててとぼけやがって！ 言えねー!!」

よし、勝った。このままうやむやにしてしまえ。この話題はこれ以上は禁止！ 終了！

私が内心でそんな宣言をしていたら、ふいにシドさんがまた口を開いた。

「……なあ、リリー」

「なんでしようか」

「俺がドレスを贈ったら、着てくれるか」

「……ん？ さっきの話をした上でその発言？」

「嫌です」

「なんでだよ」

「男性が女性に服を贈るのは脱がせたいからって言ったのは、シドさんでしょう？ それを聞いたあとに受け取るのは気が引けます」

……開き直って言ったら、黙っちゃった。なんか凄く嫌な予感がする。

見つめれば、シドさんの目に確かな熱が宿っているのに気付いてしまった。今まで私が恋の相談に乗ったメイドたちにも散々見た、その熱の名前を言うことはできない。

気付いたとバレてしまったら、もうなかったことにはできなくなるから。

「そういうば、どうしてシドさんはここに？　こんな時間ですし、レオナルド様もお休みだと思うのですが」

私はなにも知らないフリをして、別の話を振る。

色々考えすぎちゃうとアレだしね、と自分に言い聞かせていると、ああ、と小さな声が返ってきた。

「そういや、リリーがまだ起きてるなら呼んでほしいって言われていたんだっけな」

「それを先に言ってください！」

ちよ、急いで行かなきゃ駄目じゃない！

「レオナルド様、お待たせいたしました。遅くなってしまい申し訳ありません」

慌てて訪ねた部屋の中、柔らかなランプの光に照らされたレオナルド様は、いつもと少し違う神秘的な雰囲気醸し出していた。

彼の、腰に届くほど長い、艶やかでまっすぐな黒髪には天使の輪が浮かんでいる。

ゆったりとした寝間着に身を包んでリラックスしているからか、冷たい印象を与えがちな美貌は穏やかに見えた。

「こんな時間に、ごめん」

私に気付いてこちらを見たとなん、レオナルド様が微笑みを浮かべる。シドさんと同じ金の瞳は優しい光を宿し、思わず見惚れてしまうほど美しかった。

こんなに綺麗で、王宮魔法使いの筆頭と言われるほど実力があるレオナルド様。だけど、その黒髪のせいで今まで色々と苦勞をしてきたんだ。

この世界において、黒髪は生まれながらに精霊さんと契約を交わし、凄まじい魔力を持つている証と見られ、畏怖されている。特に子供は天変地異にも等しい魔力の暴走を起こすことがあるので、身内にすら疎まれることがあった。レオナルド様も昔は辛い目に遭って、感情を殺すのが当たり前になってしまっていたらしい。

最近は微笑んでくれるようになったけど、初めて会った時は本当に無表情だったんだよね。

今のレオナルド様は魔力の制御も完璧だし、美貌といい地位といい、若い貴族女性にとって格好のお婿さん候補になっている。そのせいで苦勞させられて、女性が苦手なんだとか。まあ、いまだに黒髪だからって理由で恐れられることもしばしばなんだけど。

私は前世で黒髪に慣れ親しんでいたから、彼の黒髪は懐かしくて好きなんだけど。私のこの考えと、レオナルド様へ色目を使わないところを見込まれて、ジルの母親代わりについてもらえたんだ。

今は雇用関係だけじゃなく、大事な家族だって言われている。メイドとしては駄目なんだけど、凄く嬉しいんだよね……って、しみじみしてる場合じゃなかった。

「シドさんからお呼びだと聞いて伺ったのですが、どのようなご用件でしょうか？」
 「ん。今度の僕の出張に付き合ってもらえないかな」

……出張って、いきなりですね。というか付き合ってたって、どういうこと？

「えっと、とりあえず詳しく話を聞かせていただきたいのですが」

「わかった。リリーは『眠れる令嬢』の話を知ってる？」

前世で読んだ童話『眠れる森の美女』にそっくりなお伽柵が、この世界にもあることなら知っている。大筋は前世の童話と同じで、とある貴族の令嬢が薔薇の魔法で眠り続けるお話だ。薔薇が枯れるまで目覚めることはなく、真実の愛によるキスだけが魔法を破るという。

だけど、何故今その話が……？

「薔薇の魔法で眠り続ける令嬢のお伽柵でしたら知っています」

「それ、ただの物語じゃなくて、今、実際に起こっているって言ったら？」

……つまり、その令嬢に関係するお仕事ということかな。

「現在、薔薇の魔法をかけられて眠り続けている方がいると？」

「正確には薔薇の魔法ではなさそう。それを調べてる最中」

わけがわかんなくなってきた。多分変な顔をしていたんだろう、私を見たレオナル様がちょっと笑う。

「ヴェーデン侯爵を知ってる？」

「……確か、ソロルの森を領地に持つ、辺境伯でしたか？」

この国の爵位は、公・侯・伯・子・男の順番で高い。その中で重要な場所——交易地や国境などを領地に持つ貴族は、辺境伯とも呼ばれる。

実際の爵位とは違うけれど、国にとって大事な場所を治め守護する役目に相応しいという意味の尊称だ。だから、辺境伯と呼ばれること自体に、爵位以上の意味があるんだって。

現在そう呼ばれているのは、ヴェーデン侯爵以外だと四人しかいなかったはず。

記憶を呼び起こしつつ確認すれば、レオナル様が領いた。

「ん。眠っているという令嬢が、ヴェーデン侯爵の娘」

「ああ、ヴェーデン侯爵家は、二人の令息と末の令嬢の三兄妹でしたね。その末の姫君が魔法にかかってしまったと……王宮魔法使い筆頭のレオナル様が行くほど大変なことになるのですか」

「状況が状況だから、僕が実際に見た方がいいってことになったんだ。ヴェーデン侯爵の領地は、政治的にも重要」

確かに、ソロルの森の位置する地域は、隣国との国境でもある。貿易を行うためには、森を安全に抜けることができるよう管理をしているヴェーデン侯爵の力が欠かせない。

なにしろ、ソロルの森は精霊たちの集^{つど}う不思議な場所だっけ話だからね、邪^{よしま}な考えを持っていたり、精霊を害する意思があったりする者は、森に入れないともいうし。エルフもいるんだっけ？

エルフは若々しく美しい、人間に似た外見の種族で、少し尖った耳が特徴。森の民とも呼ばれる。長命で博識だが人との関わりや争いを好まぬ穏やかな性格らしい。だけど、自らが守護する森に害を加えようとする者には容赦なく立ち向かう、勇敢さも併^{あわ}せ持つそう。

そんなエルフが住むソロルの森は、何代もかけて彼らと友好関係を築いてきたヴェーデン侯爵家だからこそ統治できている。王家は侯爵家をちゃんと尊重してるというアピールも兼ねて、レオナルド様が足を運ぶのね。

それ以外にも、レオナルド様が数少ない『見える』魔法使いだっけことも理由なんだろう。

普通、魔法は発動するまで目視できないらしい。けど、レオナルド様と魔法省の長、それとジルには、魔法を発動させる途中で展開する魔法式というものが見えるんだとか。『見える』人はとても珍しいため、ジルは魔法使いとしての将来を考えてレオナルド様の養女になった。

ちなみに、こうやって説明しているものの、私は魔力ゼロ体質と言われる人種で、魔法についてはそこまで詳しくない。

この世界では、大ききこそ人それぞれだけど、魔力自体はどんな人も持っている。ただ、それを外に出さなければ魔法として発動しない。魔力ゼロ体質の人は、魔力を外に全く出せないのだ。全然いらないわけじゃないものの、珍しいんだよね。その上、この体質の人間は、大きな魔力を持つ人の傍にいますと、魔力当たりという体調不良を起こしてしまう。

しかも、この世界の生活用品は、魔法が込められた魔石に魔力を流して使うのが一般的。だから、これまでは時々不便だった。けど今は、暮らすのに必要な魔力を出せるよう、レオナルド様が魔法で作ってくれた腕輪をつけている。

魔力当たりを防ぎ、私の身を守る魔法も込められているというこの特別な腕輪は、寝る時にだっけ外さないくらい大事なものののだ。

って、私の話より、なんで私も付き合うように言われているか、理由を聞かなくちゃ。先を促すと、考え込んでいた私を見守っていたレオナルド様が説明を再開した。

「今回は魔法使いとしての経験を積ませるためにも、ジルを連れていく。で、どうせならリリーも行く」

「魔法使いのお仕事にそんな軽い気持ちで同行していいのか、甚だしく不安なのですが」

「だって、僕もジルも貴族の令嬢への正しい接し方なんてわからないよ。かけられている魔法を見るってことは、直接触れなきゃ駄目かもしれないし」

その点、確かに私は貴族と接する機会が多かったため、色々とフォローできる。でもね……

「どうして王家はこの人に、うら若い女性のもとへ行けと言ったのでしょうか……」

他に見える人が長し^{おき}かないからだってことはわかっているけどさ。大人の男性に開き直られてしまうと、脱力もしたくなる。こういうフォロワーもメイドの仕事のうち、なのかなあ？

複雑な顔の私に、レオナルド様が続ける。

「それと、気になっていることもあるし、リリーを一人で残したくない」

「気になること、ですか」

「ん。これは極秘なんだけど、最近子供があちこちで行方不明になっているんだ」

子供が行方不明？　どういうこと？　疑問を込めてレオナルド様を見ると、彼は真剣な顔になっていた。

「みんな魔力の高い子供で、身分に関係なく消えている。中には家族に売られた子供もいるみたいだ。この間、家を襲おうとした男たちも、その関係者かもしれない」

以前、私やジル、精霊さんたちで買い物をして帰ってきたら、屋敷を守る結果を破ろうとしていた人たちがいたことがある。彼らは精霊のミリスに拘束^{こうそく}され、現在は魔法省で取り調べ中だ。その人たちが子供の行方不明事件に関わっているかもって、それってつまり――

「ジルが、狙われていた？」

「多分。だけど、なかなか口を割らない」

「……わかりました。そのような事情であれば、一緒に過ごさせていただきます」

もしも私が一人残ったところで襲われ、人質になてなったら洒落^{しやれ}にならない。この前、ジルの見習い魔法使いの試験の最中、はぐれ魔法使いカーディナルに捕まった経験だってある。あの時上手く逃げられたのは、運がよかっただけだ。次はないかもしれない

ない。

それにしても、魔力の高い子供を誘拐だなんて、いったい理由はなんだろう。考えていたら、レオナルド様がそれと、と口を開いた。

「ちなみに出発は明日の朝」

「急にもほごがありますね！」

「ん。さっき僕も手紙で言われたばかり」

え、魔法使いの出張って、こんなに急に決まるものなの？ もしそうなら、これからすぐに対応できるよう、常に準備していた方がいいかもね。

ともかく、今は急いで準備しなくっちゃ！

そして翌日。準備が整った私とレオナルド様、ジルの三人は出発の時間を迎え、屋敷の庭にいた。

一緒にソロールの森に向かうことになったのは、レオナルド様の同僚で、魔法使いのセドリック君だ。

まあ、ジルと私も行くことに決まったのはいいんだ、いいんだよ。

でも、どうして私、レオナルド様に抱き締められるみたいな体勢で、鳥の姿をとった

風の精霊アムドさんの上にいるのかな!? とつても恥ずかしいです!!

「準備はできましたか？」

「はい！」

セドリック君の言葉に、ジルが明るく返事をしている。彼が跨るグリフォンに同乗しているジルが羨ましいと言うか、むしろ場所を変わってほしい。

あ、ちなみにアムドさんは今の大きな鳥の姿以外に、人間の男性と小鳥の姿にもなれる。今は背中に私たちが乗れるよう、大きな鳥になってくれているんだ。

……うん、意識を逸らして落ち着こうとしたけど、やっぱり無理。レオナルド様とあんまりにも密着してるせいで、ダイレクトに体温とかを感じちゃって……私の心臓がうるさいのが、レオナルド様にも聞こえていそう。

私はせめて体勢を変えられないかと、レオナルド様に恐る恐る声をかける。

「あ、あの、レオナルド様」

「大人しくしないでないと舌を噛むよ？」

『俺はそんなに荒い飛び方しない……安心しろ』

レオナルド様が忠告してすぐ、アムドさんが言い切った。いや、あの、アムドさんを信用してないわけじゃなくてね？

「僕もリリーを落つことしたりしないよ？」

「それはわかっています。でも！」

「じゃ、いいよね」

ぎゃー、なんで抱き締める力が強くなるのよー！

「リリーの体は、柔らかくて温かいね。あと、いい香りがする」

「やめてくださいいいい！！」

なにこの羞恥プレイ！これ、目的地に着くまでずっと続くの！

「あはは、リリー真っ赤」

「誰のせいですか、誰の！！」

そう言って睨んだら、レオナル様は少し黙ってから、ふいに真剣な顔をした。

「リリー、どうしよう」

「はい？」

「リリーが真っ赤になったのが僕のせいだと思ったら、胸がボカボカしてきた」

……わあ、もう、開いた口が塞がらない……

「ね、どうしてかな？」

「……さあ」

なんとか言えたのはそれだけ。だって、その理由を普通に考えたら……でも、ありえない。だってレオナル様だもの、ないない。

「その言い方、リリーは答えを知ってるんだよね？」

「さあ？」

「なんか、ズルい」

拗ねたような口調に顔を上げれば、子供みたいな膨れっ面をしたレオナル様の顔があった。

「そういう風にはぐらかされるのは、子供扱いされてるようで嫌だ」

「レオナル様？」

「僕はリリーの相棒でしょ？」

いや、そういう問題じゃないんだけど。なんと言ったらいいのやら、私には見当もつかない。

自分の言った言葉で相手の女性が赤くなって胸が温かくなるなんて、それを表すのに相応しい言葉を私は知っている。だけど、言えるわけがなかった。

——レオナル様には、絶対にそんなつもりはないんだから。

「リリー」

レオナルド様の咎めるような声に、私は自嘲の笑みを浮かべる。すると、彼がハッと息を呑む気配がした。私を抱き締めていたレオナルド様の腕の力が、少しだけ緩む。

「ごめん」

「え？」

どうして謝るのですか？ そう聞こうとしたけど、再び強く抱き締められると同時に体がふわっと浮き、聞きそびれてしまった。こ、これって……

『行くぞ』

やっぱり貴方ですよねアムドさん！ でも、お願いだから飛び立つ前に言ってほしかったああ!!

というかさっきのレオナルド様の謝罪、まさか、いきなり飛び立つことに対してなの!?

『二人とも、話が長い』

「ア、アムドさんご、ごめんなさいいい」

謝るからもうちょっとスピード落として！ 速いの怖い！ 高い高い高いー!!

うう、この感覚に慣れるまでは、しばらくかかりそう……おかしいな、高所恐怖症じゃないはずなんだけど。ああ、支えがレオナルド様しかないからか。

もう恥も外聞もなくしがみついていたなら、耳元で彼の声が聞こえた。

「リリー、ごめん。あんな顔をさせたかったわけじゃないんだ」

「え？ ああ、気にしてないの」

むしろ氣にする余裕がないから大丈夫、いや、この飛んでいる状況は大丈夫じゃないんだけど。

「どうしてだろう、リリーを喜ばせたいし、笑っていてほしいのに。僕はリリーを困らせてばかりだ」

「そんなこと、ないですよ？」

レオナルド様のもとにいられて、私は幸せだもの。今だって、レオナルド様がいてくれるから怖いのをなんとか我慢できているし。この腕の中にいれば安全だって、前から知っている。怖くても大丈夫……って、あれ、この感情はまずくない？

最初のうちはこんなことを思っていたけど、結局、次第に考え事どころじゃなくなっただけ。

「リリー、大丈夫？」

『すまん』

ヴェーデン侯爵の屋敷前に到着してすぐ、私はよろよろとアムドさんから下りた。心配そうな二人になんとか微笑んだものの、そのまま座り込んでしまう。

ええ、酔いました。立てないっていうか、吐きそう。

色々と考えすぎたのと、レオナルド様の抱擁が苦しかったののダブルパンチだったみたい。

とりあえず少し休みたいけど、そうも言っていられないのよね……

「すみません、もう大丈夫ですから」

念のために持ってきておいた、酔い止めの水薬を飲み干して立ち上がる。冷たい液体を飲んだだけで、だいぶ楽になった。持ってきて本当によかった。

「お母さん、どうしたの？」

「大丈夫ですか？」

少し遅れてグリフォンから下りたジルとセドリック君も、氣遣わしげに私を見る。あ、じゃあワガママを言ってもいいかな……

「帰りは、セドリック様に乗せていただいてもよろしいでしょうか」

私も、グリフォンのもふもふを堪能したい。私の心の平安のためにもぜひ。

「え？ えーと……」

すると、セドリック君は言い淀んで私の後ろを見る。なんでかなって振り向いたら、レオナルド様とアムドさんが、この世の終わりみたいな表情で私を見ていた。ちよ……凄く悪いことをした気分なんだけど。別に、お二人のことを嫌いになったとかではありませんから！ ああ、アムドさんしょんぼりしないで!!

「わかった、わかりました！ 帰りもお二人と一緒に帰ります!!」

「本当？」

『よかった』

とたんに顔を明るくした二人に、もう笑うしかない。……帰り、大丈夫かな。

「……大変ですね、リリーさん」

他人事だと思っているのか、笑いを堪えている様子で言うセドリック君。私は彼にジト目を向ける。

「そんな同情の仕方をするなら、これからセドリック君って呼びますよ」

心の中では、ずっとセドリック君呼びなんだけど。若干の非難を込めて言ったら、何故か噴き出された。

「り、リリーさんって、ずいぶんと可愛い人んですね」

「……は？」

「いいですよ、セドリック君で。実際、まだ十五歳ですから」
 「え、嘘でしょ」

私より若いだろうとは思っていたけどさ、大人びているから三つも年下だとは思わなかった。

驚いている私に、セドリック君はくすくす笑っている。

「リリーさんは素が出ると印象が変わりますね、親しみが持てます」

「……ええと」

「よければ私には普通に話していただけませんか？ 年下相手ならおかしくないでしょう？」

そ、そこでウインクするとか、今までのセドリック君の印象が変わってしまった。

とまどう私の前で、彼はレオナル様にさっさと許可を取り付けようとする。

「いいですよ、マリエル殿」

「リリーがいいなら」

不思議そうな顔をしたレオナル様に、断る理由をひとつ消されてしまった。

「……わかったわ、セドリック君。これでいい？」

「ええ、ありがとうございます。リリーさんは姉に似ているので、今までの丁寧な口調

だと物凄く違和感がありました」

「あら、お姉様がいるの？ それも、私に似ている……？」

「ええ、性格がよく似ています。夫を叱りつけるような、強くて優しい自慢の姉ですよ」

へえ……って、こちら。

「夫を叱りつけるような、ね。まさかそれは、私とレオナル様の関係を見て言ってるのかしら」

「はい、お似合いだと思います」

悪びれもせず言いやがったなこの坊やめ。しかも、爽やかな笑みまで浮かべちゃって。

「ねえ、リリー」

「なんでしようか、レオナル様」

ちよつとイライラしていたら、レオナル様に声をかけられたので振り返る。……なんですか、その顔。まるで、おやつを貰えるってわかった時の子供みたいな。

「僕にも、そういう話し方がいい」

……いやいやいや、さすがにそれは無理ですって。そんな期待に満ちた目で見られても困る……けど、お兄ちゃんにも、家族なんだからものと親しいやり取りをしてやれっ

て前に言われている。

しばらく考え込んだ私は、妥協案を出すことにした。

「……メイドなので、人前では駄目です」

「人前じゃなかったらいいの？」

「家でも、努力します」

ああ、なんでそんなに嬉しそうに顔で笑うんですか。そんな顔をされたら、なんでもしたくなっちゃうじゃない。レオナルド様も私に相当甘いと思うけど、私もレオナルド様には甘くなっちゃうんだよなあ……気を付けないと。

そして、笑いたくないならいっそ遠慮なく笑いなさい、セドリック君。目の端に涙を浮かべて肩を震わせなさい。あ、よく見たらジルってば、グリフォンの背中で毛並みを堪能している。羨ましいからあとで私も触らせてもらおう、いいよね、それくらいの癒しを求めてもさ！

そんなことを思っていると――

「お待ちしておりました」

ふいに、柔らかなバリトンボイスが心地よく響く。振り返った先には、二人の若い騎士を連れた柔和な顔立ちの壮年男性が立っていた。

凜とした立ち姿だけれど、浮かべられた笑みには安堵と疲れが滲んでいる。

レオナルド様とセドリック君、ジルが男性の前に並んで頭を下げた。

「レオナルド・マリエル、並びにセドリック・アスファ、ジル・マリエル、王の命により馳参しました」

「ようこそ、魔法使いの方々。私がこの地を治めるランディ・ヴェーデンです。この度は速やかな対応に感謝しております」

深々と礼をするレオナルド様たちにあわせて、私も礼をする。そしたらびっくりすることに、侯爵も頭を下げた。

貴族は基本的に、自分より身分が低い者に頭を下げてはいけない。魔法使いは、どれだけ高くて伯爵と同等くらいの身分だから、今の侯爵の対応はありえないのだ。レオナルド様が珍しく慌てた声を出す。

「おやめください侯爵。我々に頭を下げるなど」

「いえ、いいのです――どうか、ミリアムを……私の娘を助けてください」

痛々しいほどまっすぐな願い。それを受けたレオナルド様は、小さく頷いた。「全力を尽くします」

自信に満ちた大きな背中とはとても恰好よくて、ちよつと見惚れてしまう。

すると、急にレオナル様が私の方を見た。

「リリー、こちらへ」

え、なんで私も呼ばれたの？

不思議に思いつつ近付けば、レオナル様が私の手を取って侯爵に引き合わせた。

「彼女は王家のメイドだったリリー・ルージャ。魔法使いではありませんが、我々の見届け人として同行してもらいました」

「貴女が……」

侯爵がスッと目を細めた。観察されていると感じたけれど、決して不快じゃない。

それにしても、見届け人？ 私、なにも聞いてないんだけど……

そう考えながらも私は、自らの立場を弁えてると言わんばかりの微笑みを浮かべる。

「彼女はそこにいるジルの母親代わりでもあり、我々を手伝ってくれる仲間でもあります。我々と同じ待遇をお願いしてもよろしいでしょうか」

「リリー嬢、お噂はかねがね聞き及んでおります。こうして直接お会いできて光栄です」

って、なんで侯爵が私に頭を下げるの!?

「お初にお目にかかります、ヴェーデン侯爵。どうか一介のメイドに礼などなさらない

でくださいませ」

「私は、貴女のおかげで救われた人々がいることを知っています。友人の中にも、貴女の力を借りて幸せになれたと話す者がおります。私どもにもどうか、お力をお貸しください」

そう言って頭を下げ続ける侯爵。とはいえ、魔法に関しては私は本当に無力なんだけど……

でも、ここでそれを告げてガツカリさせることもない。レオナル様がいるんだから、なんとかなるだろうし……うん、私にもやれることがあったら、お手伝いするだけだ。

「できる限り、お力になればと存じます」

「ありがとうございます。ああ、長旅の疲れもあるというのに、立たせたままで申し訳ない。ひとまず休憩を」

「いえ、先に様子を見せていただきたいです」

休みをと促す侯爵に、レオナル様が首を横に振る。まあ、私が酔ったくらいで、他のみなさんはピンピンしてるもんね。私だってもう平気だし。

レオナル様の言葉に、侯爵が微笑む。

「では娘のもとへご案内させていただきますましよう。……その間に、皆様の荷物をお運び

してくれ」

「かしこまりました。客室は三部屋でよろしいですか？」

いつの間にか傍にいた執事の男性に問われたので頷く。ジルと私で一部屋でしょう？あとはレオナルド様とセドリック君で一部屋ずつだから、三部屋で充分だね。

「では、皆様さつそくですがこちらへ」

私たちは王都へ帰るアムドさんと別れ、執事さんに荷物を託して、侯爵に連れられるまま屋敷に向かって歩き出した。

私たちが案内されたのは、中庭にあるガラス張りの部屋だった。元々はおしゃれなテラスなんだろうけど、今はその柱に蔓薔薇が巻きつき、床一面に色とりどりの花が咲き誇っている。壁にもありとあらゆる薔薇が咲き乱れ、馥郁とした香りが濃密に辺りを満たしていた。

その中央に置かれた白いベッドの上に眠るのは、妖精の姫君と呼びたくなるくらい儂げで美しい少女。ハイウエストの淡い色のドレスを纏い、ベッドに広がる豊かで優しい金色の髪を花びらが彩っている。

彼女を見つめ、侯爵がため息交じりに言う。

「不思議でしょう？　ここから離せないでベッドを運び込んだら、まるで娘を守るように花が咲き乱れたのです」

侯爵の呟きに、レオナルド様が真剣な顔で問いかける。

「ここから離せないとは？」

「言葉の通りです。四日前にここで倒れていたミリアムを見つけ、寝室に運ぼうとしたのですが……この東屋から出ようとすると、猛烈な眠気に襲われ、みな動けなくなったのです。仕方なく周りにガラスを張り巡らせてベッドを運び込んだのですが、その次の日にはこのような状況に」

「失礼ですが、入っても？」

「もちろんですとも、どうぞ」

きびきびと受け答えをする仕事モードのレオナルド様って、新鮮でかっこいいなあ。

なんてことを思いつつ、私も花の中へ足を踏み入れる。

腕輪はなんにも反応を見せないし、近くに悪いものはいないみたい。

眠っている令嬢を近くで見れば、やつぱりとんでもなく綺麗な人だった。

「どう、ですか。娘についてなにかおわかりになりますか」

「……とりあえず、人による魔法ではないようです」

「人では、ない？」

レオナルド様はジッと令嬢を見つめながら、なにかを宙に描いていく。それを見たセドリック君は紙に書き付け始めた。ジルはレオナルド様と同じように令嬢を見つめている。

……私はどうすればいいんだろう。魔法関係じゃ、なにもできないしな。

邪魔にならないように離れて、ため息と共に足元へ視線を落としたら、ふいに小さな影が見えた。

「……えっと」

私の靴の上に、妖精さんがよじよじ登っている。どうしよう、可愛いけどどうしよう。手のひらに乗りそうなほど小さな妖精さんは、三角帽子を被^{かぶ}つて上着とズボンを身につけた、いかにも童話に出てきそうな見た目をしている。

妖精さんを見るのは、初めてではない。彼らは草花の世話をするのが大好きだそうで、レオナルド様の家にも、庭を管理している妖精さんがいっぱいいるんだ。私も時々ハーブを摘^とむのを手伝ってもらうから、存在そのものに驚いたりはいしない。けど、靴に登り終わってやり遂げたぜみたいな顔をされると、可愛くて困っちゃう。

そうして顔を上げた妖精さんと、私の目が合った。

「ま、待って、逃げないで」

妖精さんが逃げ出したので、思わず呼び止めちゃった。ええと、とりあえずしゃがもう。

両手をお碗^{わん}みたいな形にして差し出せば、妖精さんは少し躊躇^{ためら}ってからそこに乗ってくれた。

なるべく揺らさないようにそっと持ち上げる。さてここからどうしよう。

「はじめまして、リリーと申します」

『……はじめまして』

とりあえず挨拶してみたところ、本当に小さな声で妖精さんも挨拶を返してくれた。はにかみつつちらちら私を見てくるのが、可愛すぎる！

『ミリアムの、友達？』

小首を傾げた妖精さんの問いに、驚かせないようゆっくりと首を横に振る。

「違うわ、彼女があんまりにも眠り続けるから、心配したお父上に呼ばれて来たの。ねえ、どうして彼女が眠っているのか、知ってる？」

あれ、妖精さんが顔を伏せちゃった。なにかを考えている様子なので黙って答えを待っていると、彼は真剣な顔で私を見上げる。



『お姉さんからは、仲間の心配がする。仲間がお姉さんを大好きみたい』
 「仲間って、妖精さんのこと？」

確かに、レオナルド様の屋敷で妖精さんには散々お世話になっている。
 『いつも優しく誠実に接してくれているんだって、僕にもわかるよ。僕たちは、僕たちをちゃんと見てくれる人間が大好きなんだ。だから、お姉さんは信用できると思える』

あのね、と妖精さんは声を潜めて不安そうに私を見た。

『お姉さん、ミリアムを守ってくれる？』

「……話を聞く前に領けないよ。もしミリアム様が人としてやっちゃいけないことをしていれば、その約束は守れないし」

『ミリアムは悪いことなんかしてないよ。彼女を狙う悪い奴がいるから、ミリアムを守ってほしいんだ。この魔法は、そのためにかけたんだよ』

……わあ、私、魔法についてはなにもできないのに頼られてしまった。

「守るためって、どうして眠らせなきゃならなかったの？」

『これは邪なものが朽ちるまで眠らせて時を待つ、そういう魔法だから』

「……もしかして、百年眠ったというお伽噺の令嬢にも、同じ魔法がかかっていたの？」

すると、妖精さんが頷く。あれも実は妖精さんの仕業だったのね。眠る魔法をかけたのは悪い魔法使いだとばかり思っていた。

でも、守るだけなら他の方法でもよかったんじゃないかな？

「どうしてこの魔法にしたの？」

『これなら、絶対に不審に思われるから。僕たちだけじゃあいつに勝てない。どうしても、人間の魔法使いに力を借りなきゃ駄目なんだ。この魔法なら、変だなんて思った誰かが来るって考えたの』

「でも、あなたたちにも危険が伴う方法じゃない。誤解をされるかもしれないでしょう」

『覚悟はしてたよ。それでもミリアムを守るなら、僕たちはよかった』

気が付けば、庭のあちこちから妖精さんが顔を覗かせていた。

これほどの妖精さんが彼女を守ろうとしているなら、せめてそれをレオナルド様に伝えるくらいはしないと駄目だよな。

私が妖精さんを手に乗せたままレオナルド様に近付けば、気付いた彼が振り返る。

「リリー、その妖精は？」

「先ほど見つけました。ミリアム様を守っているそうです。話を聞いてみてはいかがで

しょうか」

そう言ったら、妖精さんが私の袖にしがみついた。あれ、どうしたの？

怯えた様子の妖精さんに首を傾げると、レオナルド様は微笑を浮かべる。

「リリー。僕は魔力の弱い存在には怯えられるんだ。僕の魔力が強すぎるから」

「そうなのですか」

目を丸くする私に、妖精さんが恐々^{こわこわ}と訊ねた。

『お姉さん、怖くないの？ 黒い魔法使いだよ？』

「全く怖くないわ、レオナルド様は優しくて、絶対に私を傷つけないって知っているから」

カタカタ震える妖精さんにそう言ったところ、びっくりした顔をされた。

レオナルド様の庭にいる妖精さんたちだって同じじゃないかな。だってレオナルド様と仲良しなもの。

「強い力は確かに怖いかもしれないけど、優しいとわかってる人に怯える必要はないわ」

『……お姉さんは、本当に黒い魔法使いを信じてるの？』

「もちろん。もしもレオナルド様が私に力を向けるとしても、それにはなにか理由があ

るはずよ。むやみに怯えたりしないわ」

きっぱりと言いつれば、妖精さんは少し悩んでから、もう一度レオナルド様へ顔を向ける。

『黒い魔法使い、ミリアムを助けてくれる？ あいつから守ってくれる？』

妖精さんは私の袖をしっかりと掴みつつ、それでもレオナルド様をまっすぐ見ていた。

『それなら、ミリアムにかけた魔法を解いてもいいよ』

『魔法を解く？ ……でもこの魔法、妖精魔法とは違う』

意外そうな顔をしたレオナルド様に、妖精さんはうんうん頷く。

『うん。実際に魔法をかけたのはエルフで、僕たちはそれを維持させてるだけ。だからこそ僕たちが力を送るのをやめれば、自然と魔法は力を失う』

僕たちと言った瞬間、四方から聞こえた葉擦れの音。多分、さっきの妖精さんたちが存在を示すためにわざと鳴らしたんだろう。

『君たちが恐れているのは、なに？』

レオナルド様の問いに、妖精さんはゆっくりと口を開く。

『精霊狩り——』

レオナルド様と、それまで黙っていたセドリック君、侯爵までもが顔色を変えた。

「馬鹿な、ミリアムは魔力をそこまでは持っていないはずだ。それが、精霊狩りに何故狙われる？」

動揺したように言う侯爵に、妖精さんは首を横に振る。

『ミリアムが精霊に愛される存在だから。ミリアムを捕らえれば、助けるために精霊がやってくる。あとはわかるでしょう？』

精霊狩りの意味は理解できないけど、呼び名からして精霊に危害を加えそうだね。そして、ひとつ気になることがある。

『その精霊狩りは、もうここに來たってこと？』

『うん。あの時はなんとか守れたけど、僕たちも次は無理だってわかったから。お願いだよ、ミリアムを守って。目の前で精霊が狩られるのを、もう見せないであげて』

妖精さんの悲痛な声に、レオナルド様は頷く。

『わかった。精霊狩りの話を詳しく教えて』

そう言ったレオナルド様の目は、いつもより鋭く険しいものになっていた。

二 精霊狩りと二人の魔法使いさん

そのまま私たちは、眠りの魔法への魔力供給を止めた妖精さんから、東屋^{あずまや}で説明を聞いていた。

以前現れた精霊狩りは、ミリアム様を守ろうとした風の精霊を呑み込んで跡形もなく消えたらしい。

『精霊を襲ったのは赤い犬のような獣で、その傍ら^{かたわ}には背の高い男がいたんだ。フードを被^かつていて顔はよくわからなかったけど、覗^{のぞ}いていた髪は小麦み^{こむぎ}みたいな茶色だったよ』

そう言う妖精さんに、レオナール様は難しい顔をしている。

「黒髪ではなかった、か」

厳^{きん}しい面持ちで呟^{つぶや}いたレオナール様は、侯爵に新たな魔法使いを呼び寄せる許可を貰^{もら}っていた。そして、セドリック君が取り出した鏡に手をかざす。

ほのかに光り出した鏡から、少し間を置いて人の声が聞こえてくる。

『はい、リシャです。マリエル殿、どうされましたか？』

「ヨシユアとリズに仕事の依頼。呼んで」

『かしこまりました』

つまり、これって電話？ 魔法って本当になんでもありなんだねえ。

感心していると次に聞こえたのは低く落ち着いた男性の声と、高く可愛らしい少女の声だった。

『緊急通話を使うなんて、よほどの事態か、レオナール・マリエル』

『呼ばれたから来たよ、マリエル様!!』

「厄介^{やっかい}な仕事を、二人に頼みたい」

『いきなりそう言われてもな。詳しく説明してくれ』

「精霊狩りが現れた。再び狙われる可能性がある人物を守ってほしい」

『それは詳しくは言わないが。まあ、なんとなく事情はわかった。すぐにそちらへ向かう。いいか、リズ・マルム』

『私はどんなことだって、マリエル様がおっしゃるならやるもの!!』

『ならいい。すぐに支度しろ、急いで出るぞ。場所は?』

「ヴェーデン侯爵家」